

2019 年 5 月 19 日（日）「破滅か、希望か」

マタイ 24:3-14（その 1）

3 イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話ください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」4 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。5 わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。6 また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たものではありません。7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。8 しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。

9 そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。10 また、そのときは、人々がだれいつまずき、互いに裏切り、憎み合います。11 また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。12 不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。13 しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。14 この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。

【序論】

「世の終わりの問題」というのは、多くの人間の関心事でしょう。信仰のあるなしに拘らず、人間はどんな時にも「終わり」を意識しています。それは、人間が有限なる存在だからです。私たちの人生には限りがあり、この世において時間は無限には与えられていません。最近、面白いスマホアプリを見つけました。「あなたの『残り』の人生時計」というもので、自分の人生に残された時間を淡々と教えてくれるのです。この説教を書いている時点での私に残された時間は、以下のように出ました。

- ・ 寿命予測：82.05 歳
- ・ 残りの大切な日数：15,250.29590 日
- ・ 残った時間：50%
- ・ 使った時間：49%

これを書きながらも、時間が減っていく現実を見せられますと、「嗚呼、時間を大切にしないといけないなあ…」と思わされるものです。もっとも、これはあくまでも「寿命予測」であって、実際には 10 年後とか、今日か明日という可能性もあるわけです。

「終わり」について考えることは、私たちの生き方そのものを形成します。これは個人の人生において言えることであり、人類全体が歴史の終わりを考えることとも関わりがあります。神学的には「個人的終末」「世界的終末」という表現が用いられますが、聖書は両者を不可分のものとして描いています。重要なのは、どのような終末観をもつかということでしょう。マタイ 24 章を読むと、主イエスの終末観と、世で言われる終末観には明らかな違いがあることが分かります。

【本論】

本論 1. この世の終末観

イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話してください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」(24:3)

今回は、荘厳な神殿を見た弟子たちが歓声を挙げたが、それに対して主イエスが「神殿はやがて崩壊する」と不気味な預言をされた場面を見ました。神殿というのは、イスラエル宗教の中心であり、民を統合する「精神的支柱」そのものでした。それが失われるということは、ユダヤ人にとってアイデンティティの喪失を思わせるものであった。しかし、神殿崩壊という出来事は過去にも起きていたわけですから、今回もそうならないという保障はありません。弟子たちは恐れ、主イエスの許に集まりました。

「オリーブ山」というのは、ゼカリヤ 14:4 によると、神が降り立たれる山です。神殿からおおよそ 200m のところにあり、頂上までの高さは 840m。おそらく、主イエスは山の中腹に座しておられたのでしょう。ラビとしての権威をもって。

弟子たちは「いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか」と問うています。彼らの中では、主イエスが苦難の後に甦り、天に昇り、再び来られるということがある程度理解できていたようです。そして、その時こそ「世の終わり」なのだということも。これは一面においては正しいことを言っています。しかし、彼らは主の再臨は自分たちが生きている間に起きると考えていました。世の終わりは瞬く間にやって来ると。

世の終わりはいつどのようにやって来るか。これはいつの時代にも論議されてきたことです。近年、日本においても麻原彰晃のオウム真理教、岡田茂吉の世界救世教いづのめ教団など、様々な新興宗教が、オカルトや神霊研究などに感化されて、独自の終末論を作り上げてきました。20 世紀が終わる頃には、終末的な映画が流行り、巨大隕石の

地球衝突、エイリアンの襲来、第三次世界大戦などを描いたものが続々と世に出たように思います。その背景にはノストラダムスという人物の影響もあったのかもしれませんが。これら世に出回る終末論には共通した特徴があります。それは、「カタストロフ」(破滅)のみを語り、その先の希望がないということです。ただ人類を恐怖に陥れる。そして、その破滅からの救世主とは俺だ！と主張する変わった人が現れる。それを鵜呑みにする信者が出てくる。このような終末論が出てくる理由は、核戦争、テロリズム、エネルギーの枯渇、大地震といった人類の生存に決定的な影響を及ぼす出来事が身近になってきているからでしょう。それに乗じて様々な思想や教えが出ては消えていくのです。

主の弟子たちもまた、時代の子として、身近に起きつつある危機を感じながら生きていました。しかし、不安を抱いている弟子たちに主は言われます。

本論 2. 終末の前兆

そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たものではありません。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。(24:4-8)

世の終わりの前兆として、主が第一に挙げるのは「偽キリスト」の出現です。「我こそキリストなり」と宣言する者は、確かに1～2世紀に何人か登場しました。新約聖書に見られる限りにおいては、自分を偉い者として400人を従えたチウダ(使徒5:36)、人口調査の時に反乱を起こしたガリラヤのユダ(使徒5:37)、暴動を起こして4000人の刺客を荒野に引き連れて行ったエジプト人(使徒21:38)。これらは皆、政治的な意味における反乱者ですが、自らをキリストと称したとは言われていません。むしろ、宗教的に人々を惑わした魔術師シモン(使徒8:9)などは、初期の「偽キリスト」と言えるでしょう。2世紀に入ると、バル・コクバという指導者が第二次ユダヤ戦争を導き、ローマ帝国に反旗を翻します。その際に、彼のカリスマ性に打たれたユダヤ教ラビの最高指導者ラビ・アキバは、バル・コクバを「キリスト」と呼びました。以後、2000年に亘って「偽キリスト」は世に出続けています。キリスト教を名乗る多くの異端や新興宗教の教祖たちがそれでしょう。

第二に、「戦争のことや、戦争のうわさ」が挙げられます。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる」というのも、本質的に同じことでしょう。戦争は、人間が引き起こ

す危機です。自然災害とは違い、まさに罪の生み出す必然的帰結です。戦争が起きると、死の恐怖、苦しみ、荒廃、困窮、日常生活の妨げといった様々な悪いことが伴います。人間はそういう目に遭いたくないので、平和を叫ぶ。そして、世の終わりが近いということのある人が言い始めます。しかし主イエスは、戦争が起きたからといってすぐに世の終わりが来るとは言っておられないのです。事実、おびただしい数の戦争がこの 2000 年の間に勃発しました。1900 年代には二つの世界大戦を人類は経験した。しかし、それでも世の終わりは来なかった。主イエスは淡々と語られます。戦争は起きるものなのだ。人間に罪がある以上、戦争がなくなることはない。だから、今更のように慌てふためいてはいけないと。ロイドジョーンズは、「神はなぜ戦争をお許しになるのか」という問いに対し、「神は一度でも戦争を防ぐとか起こさないと約束なさったことがあるだろうか」「神に戦争を防がなくてはならない〈義理〉などあるだろうか」と答えます¹。これはもちろん彼が戦争を容認／推奨しているということではありません。むしろ、人間が平和を希求する理由を彼は問うのです。

「私たちが真に平和を希求すべき理由は、私たちが敬虔で、聖い生き方を送るための充実した機会を得たい、また、自分たちを信仰のうちに建て上げる時間を最大限に持ちたいという、より大きな願望に基づいているべきである。人生において人がもつばらとすべき務めは、神に仕え、神の栄光を現わすことである。」(p. 102)

私たちは、たとえ戦争の噂が報道されたとしても、慌てることなく、ますます神に集中することのみを考えたいのです。

第三に、「**方々にききんと地震が起こる**」と言われます。これは、自然界の脅威により人間が脅かされるという状況です。確かに、使徒 11:28 には、クラウディウス帝の時代(41-54 年)に起きた飢饉について述べられています。飢饉はその後、世界中で起きていることであり、日本でも 1833 年(天保 4 年)に「天保の大飢饉」が経験されています。更に、日本は地震大国でもあり、ここ 10 年の間でも、東日本大震災(2011 年)、長野県神城断層地震(2014 年)、熊本地震(2016 年)、北海道胆振東部地震(2018 年)など、数多くの大地震が発生しています。地震とともに生きてきた私たちにとって、「地震が世の終わりの前兆だ」という意識はあまりないかもしれませんが、国や地域によってはそのように感じられることがあるでしょう。飢饉や地震だけではなく。巨大な台風、環境汚染、洪水といった、未曾有の災害が私たちを取り巻いています。

しかし、主イエスはこれらについてさえ、未だ世の終わりの前兆とは言えないと言っておられるようです。本当の世の終わりには、現在私たちが見ているよりもはるかに凄まじい出来事が起きてくるのでしょう。

¹ D.M.ロイドジョーンズ『神はなぜ戦争をお許しになるのか』いのちのことば社、2015、pp.100-101

本論 3. 産みの苦しみ

8節で主は次のように言っておられます。「しかし、そのようなことはみな、**産みの苦しみの初めなのです**」。終わりの時代のしるしである偽キリストの出現、戦争の勃発、大災害といったものは、もうまさに世の終わりが近いことを示しているように感じさせる。しかし、それは「産みの苦しみの初め」なのだ。「産みの苦しみ」とは、女性だけが経験する、まさに命に関わる出来事です。その苦しみは男性には到底耐えることができません。経験したら死んでしまうとも言われるほどです。その苦しみを乗り越えて、新しい命の誕生を見るのです。苦しみの先に喜びがある。

聖書的終末観とは、大患難時代を経て完成に至る神の国の希望です。破滅を語るだけの宗教ではありません。人間の罪のために虚無に服してきた社会秩序も自然秩序も、新しい命を生み出すために陣痛を始める。それが、これまでに宣べられてきた一切の出来事に暗示されていることです。では、現在起きつつある様々な出来事とは何を意味しているのでしょうか。それは、ある意味において、弱い陣痛の始まりと言えるのかもしれませんが。しかし、本当の終わりはまだ先だと思われます。終わりの時代に入っていると問われれば、聖書は Yes と答えます。主イエスの初臨とともに終わりの時代は始まりました。しかし、それがいつまで続くのかは誰にも分かりません。主イエスご自身でさえ知らないと言っておられます。

ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。(マルコ 13:32)

では、私たちキリスト者はどのような姿勢で生きているべきなのでしょう。ここで、「個人的終末」と「世界的終末」という二つの事柄が深く結びついてくるのです。世の終わりの時代がすでに到来しているのであるならば、私たちは主の再臨がいつ起きてもいいように、心備えて生きていなくてはなりません。霊的に常に気を引き締め、「人生の主たる目標」である神に仕え、神の栄光を表すことに集中すべきであります。主イエスがいつ来られても、その方を喜んで迎えらるるように、明日この世の人生を終えたとしても、主の御前に立てるように、その日その日を整えて終えていきたいと思えます。キリスト者の念頭には常に世の終わりがある。それは、人生の終わりによって指し示され、礼拝者として新天新地に入っていく門となるのです。

私たちはこのような希望とともに生きると同時に、世の終わりがもうすぐにでも来るかのようにふれ回ったり、そのように主張する人に惑わされたりしないように気をつけていなくてはなりません。そのような教えに飛びついていく先には、怠惰、破壊、浮世離れといった非信仰的な生き方が待ち受けているからです。

【結論】

世に溢れている「終末論」を判断する基準は、その教えの最終的行き先が「希望」であるか、「破滅」であるかを見極めるところにあります。私たちにとっての終末とは、究極的には希望であり、新しい創造に対する期待です。しかし、この世にあっては苦難は付きものだということも忘れないでいたい。今回は9～14節を扱います。世の終わりの前兆を更に学んでまいります。どうか、一人一人が人生の目標をしっかりと見据えて、地上の生涯を歩み抜くことができますように。

【祈り】

アルファでありオメガである神よ。世の終わりがいつ到来するかは、あなただけがご存知です。主イエスご自身も知らないと言われました。あるいは、知っていながら語り給わなかったのでしょうか。少なくとも、私たちにそれが知らされていないということは、知る必要がないということでしょう。私たちが心の帯をしっかりと締めて歩み続けるためです。いつ主イエスとお出会いしてもよいように備えて生き、世に起こる様々な事象にも慌てることなく、やがて来る新天新地を望みつつ歩み続けることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

終わりの時代の患難の先に、希望を備え給う、父なる神の愛。

終末的前兆と思しき事象にも、心落ち着けて過ごさせ給いし、主イエス・キリストの恵み。

常に霊の目を覚まさせ、神に仕え、神に栄光を帰する生き方へと導き給う、聖霊の親しき交わりが、

我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。